

学生報告

つづきジュニア編集局を通じた子どもの学び

井上 陽介 大川 和輝

子どもたちが記者となって、地域情報を取材、ブログで発信する横浜市都筑区主催の「つづきジュニア編集局」の運営に参加し、活動を通じた子どもたちの学びを検討した。子どもたちは編集会議や取材などの実践を重ねることで、コミュニケーション力や社会的関心などの面を含め、大きく変化することが明らかになった。

キーワード：メディアリテラシー、ジュニア記者、実践を通じた学び、地域への関心

1 研究目的

つづきジュニア編集局は、横浜市都筑区が主催し、NPO 法人 I Love つづきが受託・運営する地域活動で、子どもたちが、主に横浜開港 150 周年・都筑区制 15 周年に関連したイベントを取材して、その取材記事をインターネットで発信する活動であり、記事作成を通じて、参加者の子どもたちや、記事の読者が、横浜と都筑への興味・関心を高めることを目的としている。

本研究では、この活動に参加した子どもたちの実践を通じた学びを、[1][2][3]を参考に情報の受発信や取材者としてのメディアリテラシーという観点で研究を行った。

つづきジュニア編集局は、2009 年 3 月 29 日の記者講座に始まり、2010 年 1 月現在までに、開国博 Y150 やズーラシア、都筑区長など 15 回の取材、6 回の編集会議を実施している。参加者は、小学生 28 名、中学生 11 名、高校生 1 名、中でも小学 4 年生の 15 名が最も多い。取材

は約 6 名ずつの班ごとで行なわれ、代表者が班員からのメモを受け取り、自宅で記事を執筆する。

記事のチェックや編集は執筆した子どもと運営者とのメールのやり取りで行なわれた。つづきジュニア編集局の HP を通じて、現在 19 の取材記事が公開されている。

2 研究方法

主催者、保護者、参加者の子どもたちから了解を得て、4 月 19 日以降全ての活動への参与観察を行い、また 2 回のジュニア記者向けアンケート、1 回の保護者向けアンケートを行った。ジュニア記者向けの第 1 回アンケートは、5 月 31 日の第 4 回記者講座後、参加者 30 名を対象に実施し、情報構成や、著作権など発信者としての意識を調査した。第 2 回は、保護者アンケートとともに 11 月中旬に郵送で実施し、参加による変化や感想などについて 28 名からの回答を得ることができた。

3 結果

3.1 情報収集者・受信者としての学び

第 2 回ジュニア記者向けアンケート結果より、複数のメディアから情報を得るようになるなど、1 つの情報源のみに頼らない姿勢が生まれたことが明らかになった。また、子ども新聞やインターネットを使って下調べをして質問内容を考えるなど、記者としての意識が高まった。活動後半には「質問される人がわかりやすいように、質問につながりをもたせようと思ってるの。話題がとぶとわかりにくいじゃん？」(6 年生 B さん) など、インタビューする内容をあらかじめ班員同士で話し合いスムーズに取材を行おうとするなど、インタビュー相手への配慮などもできるようになった。



写真 1 (左)
編集会議の様子



写真 2 (右)
取材の様子

INOUE Yousuke

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科 2009 年度卒業生

OOKAWA Kazuki

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科 2009 年度卒業生

3. 2 情報発信者としての学び

子どもたちの大半は第1回アンケートの時から自分の書きたいことより、読者を重視すると答えていた(30人中28人)が、実際に送られてきた記事では、当日のプログラムをただ写しているようなものや、5W1Hがないものなど、読者をあまり意識せず記事作成を行なっているものが多かった。

3. 3 地域への関心

保護者アンケートの結果から、子どもたちの地域への関心が増したことがわかり、第2回ジュニア記者向けアンケートでの自由記述欄の「もっといろいろなところに行きたい」(中2Hさん)や「子どもがやる祭以外にも大人がやる企画にも参加した」(小4Aさん)などの記述からもその様子がうかがえた。



図1 ジュニア編集局トップ
(ロゴも子どもたちがデザイン)
<http://webtown-yokohama.com/junior/>

4 考察

4. 1 情報収集者・受信者としての学び

取材経験を多く積むことで、記者としての意識が高まり、新聞やニュース、インターネットへの興味・関心が増した(第2回アンケートの回答者全員が少なくとも1つ以上の選択肢に該当するとして)。取材先の下調べのために、新聞やニュース、インターネットへの興味・関心を高めた面もあると考えられる。ただしメディア情報の真偽や隠された意図を読み解く、といういわゆるメディア批判能力については大きな変化は見られなかった。

4. 2 「記者」アイデンティティの高まり

取材の機会が多かったため、多くの子どもが、活動を通じて「記者」としてのアイデンティティを高め、自信をつけた。活動後半に行われた「ジュニア記者覆面フリートーク」でも、「友達に記者をやっていると自慢している」「この活動で自信がついた」という声が多かった。

また保護者アンケートで「つづきジュニア編集局を通して、お子さんに何か変わったと思うことはありますか」

という質問に複数回答で答えてもらったところ、28名のうち、7名が「自信がついたようだった」を選び、自由記述欄には「親がいなくても大丈夫と言えるように、自分だけの意見を持ちたいと考えるよう(だ)。(小5Kさんの保護者)」などの意見もあった。

つまり、取材経験を重ねることで自信が付き、積極的に挨拶や意見を言ったり、さらに自主的に取材を行ったり、積極的にマスメディアなどでも情報を集めるきっかけにも繋がったと考えられる。これらのことからこの活動が非常に有意義な学びの場になったと考えられる。

4. 3 発信者としての学び

一方で、記事作成のような情報発信については、知識として習うだけでは身に付かず、読者の重視も、抽象的な理解にとどまってしまうことが明らかになった。

「つづきジュニア編集局」では、毎回の取材で、代表1名のみが記事を書いていたため、大半が1回しか記事を書く機会がなかったが、複数回記事を執筆したことがある子どもでは、経験を重ねることで、より分かりやすい記事を書くことができていた。実際に記事を書くという実践が学びの場として有効だと考えられる。

また「つづきジュニア編集局」の活動では、記事の編集作業は、主にスタッフである編集者とのメールでのやり取りで行なわれていたが、執筆記事の編集作業を、仲間やスタッフと対面で行なうことができれば、編集のやり取りの中で、読者の知りたいこととは何なのかを考えながら、記事構成を熟考する機会につながったと考えられる。そして、記事編集の場が、より効果的な、発信者としてのメディアリテラシーの学びの場になりえただろう。記事を書き、編集する体験がより豊富になれば、記事の構成の背後にある意図や、内容の誤りの可能性などについても認識が深まることが期待できる。

4. 4 地域への関心を増す装置としての成功

「つづきジュニア編集局」の当初のねらいは、子どもたちや記事の読者に横浜や都筑への興味・関心を高めてもらうことにあった。実際に参加者の子どもたちの地域への関心は高まり(第2回アンケートで約半数の子どもが該当)、記事への外部からの反響・問い合わせも多かった点から、その目的は十分に達成できたと考えられる。

4. 5 今後への展望

約1年間の活動への参加を経て、子どもたちの多くがこの活動を楽しみ、今後も続けたいと希望している。われわれ運営に関わった学生メンバーも、今後も継続されるなら、活動を支援していきたいと考えている。その場合、今回の分析を踏まえて、この活動をより有意義なものにするために、執筆、編集・相互批評、読者からのフ

ードバックといった一連の発信者としての実践・経験の機会もより充実させるよう提案していきたいと思う。

謝辞

研究にご理解・ご協力頂いた都筑区役所や I Love つづきの皆さま、参加した子どもたちや保護者の皆様に厚くお礼申し上げます。

参考文献

- [1] 松本恭幸 2009 市民メディアの挑戦 リベルタ出版
- [2] 菅谷明子 2000 メディア・リテラシー——世界の現場から 岩波書店
- [3] 山内祐平 2003 デジタル社会のリテラシー——「学びのコミュニティ」をデザインする 岩波書店

(指導教員 東京都市大学環境情報学部
教授 中村 雅子)